

国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) 第 6 回ワークショップ開催

2021 年 3 月 24 日、SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) の第 6 回ワークショップがオンラインで開催され、SDG-UP 参加大学 27 校および企業・メディア各社などから 84 名が出席しました。ワークショップは昨年 10 月に始まり、今回が今年度の最終回となりました。カリキュラム、マネジメント、ファイナンス、大学評価をそれぞれのテーマとした 4 つのパネルディスカッションを行いました。

最初のパネルでは、「SDGs カリキュラム」をテーマに本プラットフォーム・アドバイザーの村田俊一関西学院大学教授がモデレーターを務め、東京理科大学、九州大学、ノートルダム清心女子大学からの 3 人がパネリストとして参加しました。大学教育における早い段階での SDGs 理解の重要性、基礎科目の質の担保と専門科目につなげてゆく際のコーディネーション、地球規模な課題を身近な社会課題としてどう取り組むかなどの課題を中心に、高大連携、社会人教育の重要性についても議論が交わされました。

第 2 パネルでは、福士謙介 IAS アカデミックプログラムオフィサーをモデレーターに、関西学院大学、広島大学、大阪大学からの 3 人がパネリストとして SDGs を促進していく際の「マネジメント」をテーマに話し合いました。大学の SDGs 活動に学生、教職員が自発的に関わるための組織作り、そのための大学の取り組みを「見える化」することの重要性が議論されました。また、企業との連携、学生の自発的なアイデアをどう支援しフォローアップするか、また、学内外でのワークショップや交流会を通じた体験教育の必要性などについて意見が交わされました。

第 3 パネルでは、北島隆次 SDGs 大学連携プラットフォーム事務局長をモデレーターとし、上智大学、東京大学および、文部科学省、(株)野村資本市場研究所から 4 人のパネリストを迎えました。「ファイナンス」をテーマに、資金調達手段の多様化や大学 SDGs 債の課題、安定的な調達手段となるための制度改正の必要性などを中心に議論が展開されました。また、サステイナブル投資による社会変容の可能性と今後大学に求められる新しい役割などについても様々な意見交換がなされました。

最後のパネルでは、本プラットフォームチェアの山口しのぶ IAS 所長がモデレーターとなり、慶應義塾大学、北海道大学、金沢大学、(株)進研アドからの 4 人のパネリストを迎え、「大学評価」について議論を行いました。インパクトランキングに参加した大学の経験から明らかとなったアカウンタビリティの重要性と情報公開の必要性、エビデンスの整備体制、学部横断的な対応の重要性について活発な議論が行われました。また、ランキングを

活用することにより、それぞれの大学の強味を認識し、大学運営の向上につなげていくことの利点など、その意義と活用法について意識が共有されました。

パネルディスカッションに続き、各パネルが議論にもとづいた提言を発表しました（※提言については別途ご紹介します）

総括では、本プラットフォーム・アドバイザーの村田教授が「今回のセッションは大変密度の濃い実りのあるものだった」と評価したうえで、4つのパネルディスカッションについて考察を行いました。最初のパネルの「カリキュラム」については、SDGsの4つのコンセプトである「社会、経済、環境、ガバナンス」を横断的に理解できる質の高いカリキュラムを一般教養として大学の初年時に教えることの重要性が確認されました。そのうえで、高大連携の強化も視野に入れながら、さらに、SDGsに含まれる多様な分野の専門性を高めていく努力が必要であることも指摘されました。また、今後の取り組みとして、SDGsのカリキュラムを英語で学ぶことができる環境整備にも言及しました。第2パネル「マネジメント」のポイントとしては、中長期的な視点を持ち、将来を見据えたマネジメント能力の重要性、また大学における異なる活動や多くの構成員をまとめていくコーディネーション力のあるリーダーシップのあり方が成功の鍵であると強調しました。さらに、SDGsが掲げる多様化した社会において「誰一人取り残さない」というビジョンを具現化するために、ますます質の高いリーダーシップが必要不可欠になるだろうと述べました。第3パネル「ファイナンス」に関しては、資金調達、投資について、戦略的に大学運営に反映できる専門知識をもった人材育成が重要な時期を迎えていること、補助金だけに頼らない大学運営の検討を示唆しました。最後の「大学評価」をテーマとしたパネルについては、インパクトランキングを始めとした外的要因が原動力となり内部改革を推し進めていくことができるという点で大変意義深いとコメントしました。アカウンタビリティの重要性に関しては、イェール大学のゴッダール教授の講演でも同様な指摘があったことを強調しました。また、インパクトランキングは若い世代が大学を選ぶ際に進路選択の参考情報にもなっている点を再確認しました。そのうえで、大学評価を今後の大学運営に積極的に活かし改革を進める中で、SDGsに興味を持つ次世代の関心をどのように高めていくかを課題として挙げました。そして、教育者である我々は、協力し合ってSDGs推進のためのカリキュラム形成を実現していかなければならないこと、また、今後どのようにクリティカルマスを形成し、チェンジエージェントの一員として学生を導いていくのか、考えていくことの重要性を強調しました。

最後に、山口しのぶ UNU-IAS 所長は、「SDG 大学連携プラットフォーム」について、2020年秋の創設と今年度の取り組みを総括し、今後の方針について述べました。山口氏は、本プラットフォームは、国連大学サステナビリティ高等研究所と日本の大学が連携する初め

での試みであり、大学が持続可能な発展に貢献するための活発な議論を行う場として設立されたことを強調しました。そして、計 6 回のワークショップを振り返り、毎回、中身の濃い議論が展開され、SDGs 推進に積極的な日本の大学のユニークな取り組みが確認できた点を指摘しました。今後、さらに国連大学の世界的なネットワークを駆使し、戦略的な情報発信を実施していく点に言及しました。具体的には、デジタルコンテンツ開発専門家による戦略的なポータルサイトの運営、Times Higher Education を含めた評価機関との継続的な対話と研究会を通じたプラットフォームとしての情報発信、参加大学の取り組みを集めた事例集の作成について説明しました。また、今回のワークショップの提言の具現化に積極的に取り組んで行きたいと述べました。今後、インクルーシブで持続可能な社会の実現に向け SDGs 関連事項が喫緊の課題として注目を集めてゆく中、「本プラットフォームで出された意見や活動が人々の行動変容を促し、より持続可能な社会の創造と繋がることを期待している」と述べ、ワークショップを締めくくりました。

参加大学 27 校（アルファベット順）

千葉商科大学

愛媛大学

広島大学

北海道大学

国際基督教大学

国際大学

神奈川大学

金沢大学

慶應義塾大学

関西学院大学

北九州市立大学

九州大学

九州産業大学

ノートルダム清心女子大学

奈良教育大学

大阪大学

大阪医科薬科大学

龍谷大学

創価大学

上智大学

東海大学

東京都市大学

東京工業大学

東京理科大学

東洋大学

筑波大学

東京大学